

接頭辞be- の類推促進機能： bemerkenを例に

Analogie fördernde Funktion des Präfixes *be-*:
Eine Untersuchung anhand von *bemerken*

佐藤 宙洋

東京外国語大学大学院博士後期課程

Takahiro SATO

Tokyo University of Foreign Studies, Doctoral Student

1. はじめに

本稿の主題は、ドイツ語の接頭辞be- である。具体的には「気づく」という日本語表現に部分的に対応するドイツ語の他動詞bemerken（およびその基盤語で同じく他動詞のmerken）を例に、「派生元の他動詞と同一性格の対格項を伴いうるbe-動詞において、be- にはいかなる機能が認められるか」という問題を考察する。¹

この種のbe- の機能に関しては、次の3つの考え方がありうるだろう。第1に、当該のbe- にも、対格ではない項の対格化を伴う他の典型的なbe- と同様か、あるいはその延長線上で捉えられるような機能がある、という考え方である。これは例えば、基盤動詞で表される行為・出来事の「対格目的語への関連付けの強調」を指摘するKühnhold/Wellmann (1973: 182)、および同趣旨の指摘をするKim (1983: 71)、Kim (1983: 71) を肯定的に引用しているEroms (1987: 113f.)、それから単に「強調」を指摘するFleischer/Barz (2012: 384) に窺えるものである。² 第2に、当該のbe- には、それ特有の機能があるとも考え

¹ 筆者は同じ問題をbeschützenを例に一度扱ったことがあるが（「ドイツ語の接頭辞be- の強調機能について：beschützenを手がかりに」、『エネルギー』42, 2017, 15-33.）、今回は、他のbe-動詞を例に考察をさらに深めたい（その結果として本稿は、当該のbe- に対し上記論文から予想されるものとはかなり異なる見解に至る）。なお、接辞は抽象的な型を表示し（Motsch 2004: 17）、その型に応じて意味的・統語的变化が起こると厳密には言うべきだろうが、他の先行研究との接続を考慮し、意味的・統語的变化が接辞の何らかの「機能」によって生じるという言い方をする。

² ここで言う、基盤動詞で表される行為・出来事の「対格目的語への関連付け」は、逆から見れば、対格項が動詞で表される行為・出来事に「関連付け」られているということである。つまり、「対格目的語への関連付け」は、成田（2005）で言われている、ある項の「焦点化」「前景化」と実質的に同内容と考えられる。

られる。例えばBrinkmann (1971: 422) は、いくつかの当該be-動詞 (behalten, benutzen, befühlén, beheizen, besehen, betreiben, bewahren) に関して、「動詞で表される過程の強調」を指摘している。³ 第3に、上記いずれとも異なる機能の可能性も考えられる。

以下ではまず、考察の前提として、bemerkenとmerkenの意味用法の差異の解明に取り組む (2章)。それから、それを手がかりにbe- の機能を考察する (3章)。結論として本稿は、「bemerkenのbe- には、bemerkenとbeobachten等とのさらなる意味的・統語的共通性を類推することに貢献する機能がある」という仮説を提示する。つまり、当該のbe- は「関連付けの強調」や「過程の強調」に収斂しきらない、より具体的な機能を有すると考える。

2. merkenとbemerken

2.1 先行研究

merkenとbemerkenは、「気づく」という語義において類義であることが知られている (例えばDuden 8 2010: 631を参照)。⁴ 確認のために、両語の対になる文例をDewell (2015: 77f.) から何例か引用しておく。それぞれがmerken, bがbemerkenの用例である。なお、引用に際しては表記を適宜変更し、参考の為に拙訳を付す (以下同様)。

- (1) a. Sam hat wohl schon vorher **gemerkt**, dass er da ist, denn sie hat sich nicht erschreckt und dreht sich langsam um.
サムは彼がいることに前からもう気づいていたのだろう。というのは、彼女 [サム] は驚くことなく、ゆっくりと振り返ったからだ。
- b. Bisher hat sie jedoch immer rechtzeitig **bemerkt**, dass er da ist, und ist entweder im Auto oder im Haus geblieben.
これまでではしかし、彼女はいつも、彼がいることに時宜よく気づき、車中か家の中に留まった。
- (2) a. Man **merkt** den Schmerz meistens erst, wenn alles vorbei ist.
大抵の場合、すべてが過ぎ去ってから初めて痛みに気づく。

³ Dewell (2015) も同様の見解と言えるが、Dewell (2015: 53ff.) の主張はもっと強く、be- 一般にこの機能が認められるとする。

⁴ bemerkenは、多くの場合発言内容を伴って「述べる」という語義でも用いられ、merkenは、ほとんどの場合与格の再帰代名詞を伴って「記憶する」という語義でも用いられるが、「気づく」という語義のみを取り上げる。

b. Sie **bemerkt** den Schmerz, bemerkt ihr Wanken, sie klammert sich an einem Sitz fest.

彼女は痛みに気づき、足のふらつきに気づき、座席にしがみつく。

(3) a. Das Englisch war gut, bei dem Deutsch hat man durchaus den Akzent gemerkt, aber ansonsten war alles fehlerfrei.

[彼の] 英語はよかった。ドイツ語にははっきり気づける訛りがあったが、その他は完璧だった。

b. Sobald man jemanden auf der Straße auf Französisch anspricht und er den Akzent bemerkt, wird man die Antwort in schlechtem Englisch erhalten.

通りで誰かにフランス語で話しかけても、訛りに気づかれるやいなや、下手な英語で返事を返される。

意味役割で言えば、merkenとbemerkenは、主格で実現する〈経験者〉の項と、対格で実現する〈対象〉の項を伴う。上記の例からは（筆者による下線部）、〈経験者〉に関しては勿論のこと、両語が〈対象〉として、かなり共通する性格の語句を伴いうることが分かる。

Dewell (2015: 78) によれば、上記の例においてmerkenとbemerkenでは意味が異なるとはいえ、どう異なるのかに関しては見解の不一致が甚だしい。⁵ 両語の差異に関する先行研究には、Dewell (2015) の指摘するように、ほとんど正反対の見解が併存しているように見えて興味深い。

本章では以下、両立場の記述を確認し、対立の要点をまとめた上で、両立場を踏まえ提案されたDewell (2015) の見解を紹介する。

2.1.1 感覚的なmerken, 理知的なbemerken

第1に、Farrell (1978) に代表されるように、merkenでは「気づき」の感覚的側面に焦点があるのに対し、bemerkenではむしろ思考・推量という側面、いわば理知的側面に焦点があるという見解がある。Farrell (1978: 233f.) は、merkenとbemerkenの違いについて次のように記述している。aがmerken, bがbemerkenに関する記述である。なお、原文註および例文は省略する。

⁵ いかなる文脈でも意味の違いが明確であるとは述べていない、と解したい。Donaldson (2004: 100) のように、多くの文脈ではどちらを使っても大差がないと断る文献もある。同箇所では、Hast du gemerkt/bemerkt, dass...?; Ich habe es nicht bemerkt / Ich habe nichts davon gemerkt という例が挙げられている。

- (4) a. **Merken** suggests alertness of the senses, that the mental realization comes immediately through these, i.e. without reflection. It is therefore the only term that can be applied to animals. Negatively, it implies that one is not sufficiently alert to notice what is obvious.

Since it so strongly suggests the activity of the senses, a word denoting a smell can be the object. On the other hand, the object cannot be a person.

In general, only *merken* is possible when ‘notice’ is followed by ‘from’.

- b. **Bemerken** is less vivid and sensuous than merken. It implies mental activity, however brief, after the sense perception, and an inference from the sense material, the meaning of which is not immediately obvious. The observation is therefore more subtle than with *merken*.

A personal object may follow, but only to indicate that something special, noteworthy, attaches to the presence of a person in a certain place. A smell cannot be the object.

Bemerken cannot be used in the imperative.

(4) からは（特に、筆者による下線部）、Farrell (1978) が、感覚的な merken 対、理知的な bemerken という図式で基本的には論じていることが分かる。なお、(4) には、両語の意味用法の差異に関する具体的な指摘がいくつか含まれているが、その検討は次章で適宜行う。⁶

2.1.2 理知的な merken, 感覚的な bemerken

しかし2.1で述べたように、Farrell (1978) とはほとんど正反対に見える立場も存在している。そうした立場の代表としては Beaton (2001) が挙げられる。

Beaton (2001: 464) の見解を整理しつつ示すならば、次のようになる。merken と bemerken にまたがる記述は (5) に示し、別々の記述は (6) に示す。

⁶ 例えば中條 (1982: 542f.) も、merken と bemerken に関して Farrell (1978) とほぼ同内容の指摘をしている。ただし、中條 (1982) は Farrell (1978) を参考文献に挙げている。

なお、原文の例文は省略する。

(5) Both *merken* and one sense of *bemerken* are translated as to *notice*. [...] Both *merken* and *bemerken* are used with human beings or animals as subj. and with *an* = 'from, in, about' . [...] While *merken* is a common everyday term, *bemerken* belongs more to the educated language. [...]

(6) a. **Merken** presupposes not just seeing with the eyes but also drawing a conclusion, however brief, from what is seen or from the way people behave. It suggests becoming aware of what is not immediately clear or is the hidden motive behind some action. It is often close to *realize* and frequently suggests intuition rather than a distinct sense perception.

b. **Bemerken** denotes a sense perception, usually by the sight, but sometimes by smell or hearing. [...] Only *bemerken* is used with a person as obj.

筆者による下線部に特に明らかなように、Beaton (2001) は、merkenが理知的でbemerkenが感覚的と見なしていると言える。また、Dewell (2015: 79) によれば、ある語学サイト⁷におけるmerkenとbemerkenの使い分けの議論でも、インフォーマントの多くは、Beaton (2001) と近い見方をする傾向があるという。なお、(5) (6) にも両語の意味用法の差異に関する具体的な指摘が含まれているが、その検討は次章で適宜行う。

2.1.3 中間まとめ

Farrell (1978) や Beaton (2001) の記述に依拠すれば、「気づき」には2種類あることになる。一方は、感覚器官を通して情報を受け取るという意味での「気づき」、いわば「知覚としての気づき」であり、他方は、そこからの推量・思考を経ての「気づき」、いわば「識別としての気づき」である。Farrell (1978) は、「知覚としての気づき」がmerkenで、「識別としての気づき」がbemerkenと論じ、Beaton (2001) は逆に、「知覚としての気づき」がbemerkenで、「識

⁷ LEO, dict.cc, Wortreference.com, wer-weiss-de, gutefrage.net, Gesellschaft zur Stärkung der Verben (verben.texttheater.net)

別としての気づき」がmerkenと論じている。

それでは、どちらが正しいのだろうか。もしくはどちらも正しくないのか。この問題に関しては、すでにDewell (2015: 77ff.) が詳しく論じているので、実例分析の前にそれを参照しておきたい。

2.1.4 単一的なmerken, 複合的なbemerken

Dewell (2015: 77ff.) は、どちらの立場にも完全にはコミットしていないように思われる。一方では、「新しい髪型」のように〈対象〉が推量を差し挟む余地のない程知覚的に明らかな場合、merkenではなくbemerkenが用いられるのは確かだとして、bemerkenが感覚的でmerkenが理知的と考えるBeaton (2001) やインフォーマントらに一定の理解を示す。

しかし、Dewell (2015: 81) 自身の主張は、merkenはストレートな知覚を表すのに対し、bemerkenは何かを意識するというだけではなく、何かに対する意図的な注意も含むという点にある。merkenは単一的な出来事（「気づく」）であるのに対し、bemerkenは複合的な出来事（「意図的な注意」+「気づく」）であり、さらには継続的な過程であるという。⁸ Dewell (2015) は、この複合性と関連し得る抽象性・微妙さをbemerkenに指摘していたという点で、Farrell (1978: 233f.; (4b)) をむしろ評価していると言える。⁹

確かに、Dewell (2015) で挙げられている例には、「意図的な注意」という契機・段階のあるbemerkenと、その契機・段階を必ずしも含まないmerkenという対立が多かれ少なかれ読み込める。すでに引用した例で言うと、(1) のbでは、習慣もしくは反復が話題であることから、「彼女」が「彼がいる」かどうか

⁸ Dewell (2015) はbemerkenの継続性に関して、このあたりの箇所 (S. 80f.) では特に説明をしていないが、継続性は時間的に異なった複数の契機 (Moment) を前提にすると考えられるので、継続性と複合性にはつながる部分があると推察される。

⁹ Dewell (2015: 81) は他にも、merkenの対象は、「気づく」ことと同時に心的表象として生起するのに対し、bemerkenの対象は、「気づく」ことに先立って現実に存在するという趣旨の論述をしている。ただし、「気づく」という語義でのmerkenとbemerkenの差に限れば、重要なのはやはり「意図的な注意」という契機・段階の有無の指摘の方だと思われる。「Aに気づく」という例で考えてみたい。bemerkenが「意図的に注意」して「気づく」ことを表すとすれば、「気づく」以前に、注意の対象xが存在している必要があり、それに注意するのでもなくてはならない（この時点ではまだ「気づき」が起きていないわけだから、対象をAとは呼べない）。しかる後に対象xをAと同定するのが、bemerkenにおける「気づき」であると考えられる。したがって、「意図的な注意」という契機が存在するのであれば、対象は必ず（同定されていない状態とはいえ）存在してはならず、後者は前者の論理的帰結ということになる。つまり、問題なのはあくまで「意図的な注意」という契機が存在するかどうかの方と言える。したがって、本文では対象の既存性をめぐる議論を取り上げないこととする。

注意していたことが読み取れるが（意図的に注意していなければ、「いつも」時宜よく気づくことはできない）、aではどちらとも言えない。(2)のbでも、「彼女」は意図的な注意を要するような何らかの危険な状況にあると読めるのに対し、aでは必ずしもそうではない。(3)のbも同様で、フランス語の母語話者かどうかを意図的に注意した結果の気づきと読めるのに対し、aでは必ずしもそうではない。

merkenとbemerkenに関するDewell (2015) の論述は、大変興味深いとはいえ、事例分析による検証と補強が望ましい。また、Dewell (2015) が両語の差異を果たして十分に捉えているのかも検討する必要があるだろう。

2.2 事例分析

merkenとbemerkenの実際の差異を解明するために、両語の実例を収集し分析する。文例の収集にはCOSMAS IIの書き言葉コーパスを用いた（W-öffentlich - alle öffentlichen Korpora des Archivs W (mit Neuakquisitionen)、検索日：2017年7月3日）。現在分詞形と、何らかのエラーと思われる語頭以外に大文字を含む形を除いて検索した結果、merkenに関しては33万2142件、bemerkenに関しては25万914件ヒットした。

ところで先行研究 (5) では、bemerkenは教養ある人が使う語でmerkenは一般語と言われていた。両語のヒット件数の差が、そういった区別を反映している可能性もあるが、他の要因による可能性も十分考えられる。Dewell (2015: 80) も、bemerkenは確実に一般的な語と述べているし、DWDS (www.dwds.de；最終アクセス：2018年1月4日) の頻度表示でも、両語とも7段階中少ないほうから5という評価である。文体差が仮にあるとしても、それが両語の差異としてそこまで関与的とは考えにくい。

次に、ヒットしたデータから各200例ずつ無作為抽出した。両200例を、態・構文、それから語義によって分類すると、次の表の通りになる。¹⁰ 表1からは、bemerkenの方が受動態と相性のよい傾向が窺える（本文に対する下線は、bemerkenの特徴に関する分析の結論を表す、以下同様）。

¹⁰ merkenにおいて、「記憶する」の語義が必ずしも再帰用法で実現するとは限らないこともあり、「気づく」という語義と区別の難しい場合があった。またbemerkenにおいても、「気づく」と「述べる」の語義区分が、文脈上難しい場合があった。したがって、数字は多少変動する可能性がある。

	merken		bemerken	
能動文	167	気づく : 150	171	気づく : 115
		記憶する : 17		述べる : 56
werden受動文	2	気づく : 2	16	気づく : 12
		記憶する : 0		述べる : 4
話法不定詞構文	4	気づく : 4	10	気づく : 8
		記憶する : 0		述べる : 2
その他・対象外		27		3
計		200		200

表1 : merkenとbemerken各200例の内訳

本章では以下、「気づく」という語義の能動文に注目し、両語の分析と考察を行う。つまり、merken 150例、bemerken 115例が主な対象となる。以下2.2.1と2.2.2では先行研究に鑑み、各語に関して、対格補語・補文つまり〈対象〉と「認識の手がかり」を表すan前置詞句に着目して分析結果を述べる。¹¹ Dewell (2015) のbemerken論に関しては2.2.3で検討する。

2.2.1 merken

2.2.1.1 対格補語・補文、〈対象〉

merkenの150例のうち、一種の成句 (wie jd. merkt 「お気づきのように」) と見なせる4例を除く、146例で〈対象〉が表示されていた。merkenは、後述のbemerkenと同様に、基本的には〈対象〉表示を必須に伴うと言える。

それでは、merkenの〈対象〉の特徴は何だろうか。分析結果からは、以下の3つがその候補と思われた。

第1に、各種先行研究でも意識されていたように、merkenの〈対象〉は抽象物のみであることが挙げられる。表示されていた〈対象〉146例は、何れも直接手で触れたり目で見たりできない抽象的なものと言える (例えば (7) の「変化」)。また、dass文を伴う例が75例 (51%) と多く見られた (8)。¹²

¹¹ 先行研究 (4b) では、主格主語における差異が指摘されていたが (merkenでのみ〈経験者〉として「動物」が共起)、少なくとも今回の分析の結果からは、裏付けが得られなかったため、本文では取り上げない。

¹² 他の例としては、Absicht, Unterschiedといった名詞、それから、es, das, nichtsをはじめとする各種代名詞、W文等も挙げられる。

(7) Ich glaube auch nicht, dass die Menschen überhaupt etwas von der Krankheit mitbekommen, es sei denn, man hat sehr gute Menschenkenntnis und **merkt** die Veränderung des anderen. (Nordkurier, 21.11.2009)

人々がそもそもその病気について何か分かっているとは私は思いません。非常な人間理解を持ち、他人の変化に気づく人は別ですが。

(8) Ich habe zwei Kinder, einen 16-jährigen Sohn und eine dreieinhalbjährige Tochter, da **merkt** man auch, dass Jungen emotional fauler sind. (Nürnberger Nachrichten, 29.11.2007)

私には子供が2人、16歳の息子と3歳半の娘がいるのですが、男の子の方が感情的に不活発なことに気づきます。

第2の候補は、wie文に関するものである。merkenがwie文を伴う例は計7例であり、そのうちの6例は、次のようなwie+形容詞構文であった。

(9) Aber bald **merkten** sie, wie umfassend sich diese Liebe entwickelt. (Weltwoche, 18.11.2010)

しかしすぐに彼らは、どれほど広範にこの愛が発展するかに気づいた。

ところでDuden 4 (2009: 1046) によれば、merkenやbeobachtenのような知覚動詞は、dassに導かれる副文と並んでwieに導かれる副文を伴える(10)。wieに導かれる副文を伴うと、知覚の過程(Wahrnehmungsverlauf)が明確になるといふ。この種のwie文を、「同時知覚のwie文」と呼ぶことにする。¹³

(10) Ich **merkte**, dass meine Kräfte nachließen. Ich **merkte**, wie meine Kräfte nachließen. (Duden 4 2009: 1046)

私は、自分の力が衰えたことに気づいた。私は、自分の力が衰えていくことに気づいた。

この同時知覚のwie文の可能性が、wie文7例中の残る1例(11)にはある。しかし(11)は、程度のwie文とも解釈できるため、現時点ではどちらか判断

¹³ Vater (1976) や Zifonun et al. (1997: 2269f.) では、同時知覚のwie文を伴う動詞として、merkenに直接の言及はない(bemerkenは例示されている)。

しかねる。¹⁴ なお、いずれにしてもmerkenと同時知覚のwie文が共起する頻度は、後述のbemerkenと比べると若干低いことになる。

(11) Ich hatte Erfolg bei Frauen. Das ergab viele One-Night-Stands. Doch wenn ich **merkte**, wie sich eine Frau für mich interessierte, habe ich [e]s oft versiebt. [...] Ich habe eine Nase dafür, wenn sich eine Frau für mich interessiert. (Sonntagsblick, 23.02.2014)

私は女性にもてたのだ。だから一夜限りの関係を多くもった。けれども私は、
{|ある女性が自分に興味をもっていくことに気づいた場合／ある女性が自分に
どれほど興味をもっているかに気づいた場合|, 台無しにするようなことを大
抵してしまった。[中略] 私は、女性が自分に好意を持っていると、それに勘
づくのです。

第3にmerkenは、大抵はコロン(:)を介する形で、V2文を内容文として伴
いうる点が特徴的である。今回の分析ではそうした例は6例見られた(12)。な
お、詳しくは後述するように、bemerkenではV2文との共起は見られなかった。

(12) „Wir haben **gemerkt**: Das ist nicht die richtige Arbeitsweise“
(Mannheimer Morgen, 07.01.2008)

「私たちは気づいた、これは正しいやり方ではない、と」

2.2.1.2 an前置詞句

先行研究(4a)は、いわゆる「認識の手がかり」を表すan前置詞句との共起
の差を指摘していた。今回の分析において、merkenが当該のan前置詞句と共
起した例は4例ある(13)。なお、詳しくは後述するように、bemerkenではan
前置詞句との共起は見られなかった。

(13) An der Luftfederung und den Alufelgen merkt man auch, daß
Subaru ein fixes Standbein im Rallye-Sport hat. (Die Presse,
08.02.1997)

エアサスペンションとアルミリムで、スバルがラリー競技に軸足を置いている
ことも分かる。

¹⁴ 匿名の査読者から、(11)は同時知覚のwie文とは解釈できないという指摘を受けている。

2.2.2 bemerken

2.2.2.1 対格補語・補文、〈対象〉

「気づく」という語義のbemerken は115例であったが、そのすべてにおいて〈対象〉の表示が見られた。「気づく」という語義のbemerkenは、merkenと同様、対格補語・補文を基本的には必須に伴うと言える。なお、merkenで見られたようなwie jd. bemerkt という形での自動詞用法も能動文全171例中には4例見られたが、それらは「述べる」という語義と判断された。

それでは〈対象〉の内訳について述べる。第1にbemerkenは、merkenが伴うような抽象名詞も (14)、それから、merkenにおけるよりは頻度が少し下がるにせよ依然それなりの頻度で (27%)、同じく抽象的と言えるdass文も〈対象〉として伴いうる (15)。

(14) Dabei **bemerken** die Verkäuferinnen durchaus eine Veränderung bei den Kunden: „Früher kamen vor allem Männer, heute kaufen auch viele Frauen Geschenke. Die Emanzipation ist auch beim Valentinstag angekommen“ (Rhein-Zeitung, 13.02.2014)

その際販売員の女性たちは、お客さんの変化に完全に気づいている。「以前は、とりわけ男性たちが来ていましたが、今日では、多くの女性もプレゼントを買います。女性解放は、バレンタインデーにも到来しているのです」

(15) Ich glaube, dass viele Singles am Samstag nur ganz verschämt oder aber betont locker DVDs ausleihen, weil sie nicht wollen, dass jemand **bemerkt**, dass sie den Film danach allein auf dem Sofa angucken. (Die Tageszeitung, 27.11.2010)

思うに、独身の人の多くは、土曜日に非常に恥ずかしい思いしないと、もしくは際立って〔不自然に〕気楽な感じでないと、DVDをレンタルできないのです。なぜかといえば、その人たちは、自分たちが映画をその後独りでソファに座って見ることを誰かに気づかれたくないからです。

その一方でbemerkenには、〈対象〉として「人」や「物」といった具体物を伴いうるという特徴がある (16)。¹⁵ Kim (1983: 74) が述べているように、bemerkenにおいてはbe- の付与による対格補語・補文クラスの拡張が見られるのである。¹⁶

(16) Die Beamten hatten den Fahrer bemerkt, weil er mit hoher

Geschwindigkeit fuhr. Als sie ihn kontrollieren wollten, hielt er zunächst an, gab dann aber wieder Gas. (Nordkurier, 01.07.2013)
 警察はその運転手に気づいた [その運転手が警察の目にとまった]。なぜなら、彼は高速度で走っていたからだ。警察が彼を検査しようとした際、彼はいったん停車したが、それからまたアクセルを踏んだ。

第2にwie文について述べる。wie文との共起は4例見られ、いずれも同時知覚のwie文と解釈できる例であった (17)。さらなる検証が望ましいが、同時知覚のwie文との共起頻度は、merkenよりもbemerkenにおいて高い可能性がある。

(17) Zwei Männer haben vor den Augen der Eigentümerin in Schwedt ein Fahrrad gestohlen. Sie war in einer Bäckerei und bemerkte, wie die Männer das Schloss knackten und mit ihrem Rad flüchteten. (Nordkurier, 09.09.2010)

2人の男が自転車を一台中シュヴェット在住の持ち主の女性の目の前で盗んだ。彼女はあるパン屋にいて、男たちが鍵をこじ開け、乗り逃げしていくのに気づいた。

第3に、V2文を伴えるか否かについて述べる。先述のように、merkenではそうした例が6件確認されたが、bemerkenでは見られなかった。そのことから、merkenよりbemerkenの方が、V2文を伴う頻度は低いように見える。しかしながら、V2文の共起頻度の差は、両語の本質的な違いとは言えない可能性が高い。というのも、bemerkenとV2文が共起する例自体はあるが、その際は「述べる」という語義と解釈されやすくなる結果、「気づく」という語義のbemerkenとV2文の共起頻度が低く出ている面があると考えられるからだ。「気づく」という語義においては、merkenもbemerkenも事実的な動詞と考えられ、その意味でV2文を伴える条件に違いはない。V2文の共起頻度の差は、「気づく」

¹⁵ 先行研究にはbemerkenが「におい」を対格目的語として伴わないとの指摘もあったが (4b)、次のような反例が見出された。Kamin brannte [.] Brandgeruch in ihrem Haus bemerkte am Montag früh ein 75jährige [sic] aus Warth. (Neue Kronen-Zeitung, 06.01.1998)

¹⁶ 対格クラスは、あくまでbemerkenにおいて拡張しているのであって、merkenにおいて縮小しているわけではないと解する。そう解さないと、merken - bemerktenにおいては、形態的な有標性と意味的な有標性が逆転していることになるが、敢えて逆転を見出す必要はないと思われる。

という語義におけるmerkenとbemerkenの差異というよりは、bemerkenにおける「気づく」という語義と「述べる」という語義の差異と考えられる。

2.2.2.2 an前置詞句

bemerken 115例中には、認識の手がかりを表すan前置詞句との共起は見られなかった。merkenの場合と比べて、bemerkenとan前置詞句の共起は稀な可能性がある。ただし、一般的な辞書記述に鑑みるに、bemerkenと当該のan前置詞句が共起することもあるのだろう（(4a)に含まれる指摘は強すぎる）。

(18) sie **bemerkte an unseren Gesichtern**, dass etwas vorgefallen war.
(Duden 2 2012: 175)

彼女は我々の顔を見て、何かが起こったことに気づいた。

2.2.3 Dewell (2015) のbemerken論

merkenはストレートな「気づき」を表すのに対し、bemerkenは「気づく」ことだけでなく「意図的な注意」も含むというDewell (2015: 81) の見解を論じる。この見解は、実例でも確かめられるのだろうか。

結論を言えば、Dewell (2015: 81) の上記の見解は、実例分析からも概ね支持される。まず、反例が見いだせなかった。既出の例だと、例えば (16) において、bemerkenが「意図的な注意」という契機・段階を含んでいるのがとりわけ明瞭に思われる。「警察」は、潜在的交通違反者に職務上注意していたと言える。さらに、(14) では「販売員」が、(15) ではおそらくスタッフが、客に関して仕事のうえで多かれ少なかれ注意していると言える。

とはいえ、Dewell (2015: 81) の見解もしくは表現には洗練の余地もある。bemerkenは「意図的な注意」を単に「含む」(involve) というよりも、「前提とする」(presuppose) と言う方がより正確であると考えられる。この見解には、否定文の観察から導かれる。収集例においてbemerkenの否定は、「気づく」ことの否定ではあるが、「意図的な注意」の否定にはなっていない。例えば (19) で発言者は、「危機」がないかどうかには、つまり、危機と呼ばれうるかもしれない状況に対しては明らかに注意している。そのうえで、危機がない、もしくは、大した危機ではない、という見解を、「気づいていない」と表現していると言える。

(19) "Momentan **bemerke** ich von der Krise nichts beziehungsweise

nicht allzu viel. Mein Gefühl sagt mir, dass sich die Krise auch im Jahr 2010 nicht so schlimm auswirken wird, wie von manchen Medien prognostiziert. “ (Niederösterreichische Nachrichten, 28.12.2009)
 「目下のところ私は、危機について何も、もしくはあまり多くは気づいていません [感じっていません]。内心では、この危機は2010年になっても多くのメディアが予想しているよりは悪くならないと思っています。」

bemerkenが「意図的な注意」という前提を有することは、merkenの場合と比べるとより明確になる。merkenの方は、そのことを前提としておらず、したがって、merkenの否定は「意図的な注意」をも否定することができる。例えば(20)では、〈経験者〉は寝ていたわけだから、「意図的な注意」は当然できなかったことになる。

(20) ”Ich habe nichts **gemerkt**, mich haben die Feuerwehrleute geweckt. “ Der Brand konnte rasch gelöscht werden, es entstand lediglich 30.000 Schilling Schaden. (Neue Kronen-Zeitung, 28.03.1994)
 「私は何も気がつかなかった、私は消防の人たちに起こされたのです。」火事は素早く消され、損失は3万シリングだけだった。

(20) のような「寝ていて気づかない」という文脈で、merkenの否定が用いられる例は他にも見られたが、bemerkenがそのような文脈で用いられる例は見られなかった。これも、bemerkenの否定が「意図的な注意」はやはり否定しないからではないかと、言い換えれば、bemerkenが「意図的な注意」を前提とするからではないかと推察される。

Farrell (1978) の観察もしくは語感も、上記の見解の傍証になる可能性がある。Farrell (1978: 233f.) は、merkenに関してのみ、否定文で、明らかな〈対象〉への〈経験者〉の注意不足を暗示するという趣旨の指摘をしていたが(4a)、そのことから、一方のbemerkenでは、否定文でも「注意」自体は否定されないと考えていたことが推察される。

以上のことから、bemerkenには「意図的な注意」という前提が認められる、と本稿は考える。

2.3 まとめ

本章では、両語の意味用法の違いが、言い換えればbemerkenの特徴が5点導

き出された。整理しつつ一覧にしてまとめておく。なお、V2文の共起頻度の差は、2.2.2.1で述べたように本質的な差異ではない可能性が高いため、一覧には加えないで置く。また、件数の差が小さく現時点で明らかな差異と断言できない点には、疑問符を付した。次章では、これらに解釈を加えつつ、差異が生じる仕組みを考察する。

- (21) ①受動文との相性：merken<bemerken
 ②〈対象〉の種類：両語とも [+抽象物] であるが、merkenでは [-具体物]、bemerkenでは [+具体物] である
 ③? 同時知覚のwie文の共起頻度：merken<bemerken
 ④? an前置詞句の共起頻度：merken>bemerken
 ⑤「意図的な注意」という前提: bemerkensのみ有する

3. bemerkensのbe-

bemerkenのような、派生元の他動詞と同一性格の対格項を伴いうるbe-動詞のbe- に関しては、1章でも述べたように、従来の研究では大きく分けて2つの見解が提示されてきたように思われる。第1に、当該のbe- は、基盤動詞で表される行為・出来事の対格目的語への関連付けを強める機能を有するとの見解がある (Kühnhold/Wellmann 1973: 181ff.; Kim 1983: 71; Eroms 1987: 113f.)。この見解を以下では、「関連付けの強調説」と呼ぶ。第2に、当該のbe- は、基盤動詞で表される過程を強調する働きを有するとの見解がある (Brinkmann 1971: 422; Dewell 2015: 53ff.)。この見解を以下では、「過程の強調説」と呼ぶ。

したがって本章では、上記の2機能が実際にbe- に認められるかを考察するところから始める。

3.1 2つの強調説の検討

まず、関連付けの強調説を取り上げる。結論から言えば、この機能は、bemerkenのbe- には認めにくいように思われる。完全に認められないとは断言できないが、仮に認められるとしても、弱くしか認められないと思われる。

第1に、merkenでもbemerkenでも対格補語・補文は基本的に必須という事情がある。仮にmerkenで自動詞用法がもっと頻繁に見られるのであれば、be- には当該機能を認める必要があるだろうが、そうっていない。

第2に、一見当該機能の表れに見えるbemerkenの諸特徴 (①と④) は、いずれも根拠とするには十分と言えない可能性が高い。bemerkenと受動文との相

性の良さ (①) も、受動文形成の動機が多様でありうることに鑑みると、関連付けの強調によるとは必ずしも言えない。また、an前置詞句との共起頻度の差 (④) も4件差と小さい。仮にもう少し差が大きければ、bemerkenにおいて対格目的語への関連付けが強まった結果 (言い換えれば、対格目的語が強く前景化された結果)、an前置詞句への関連付けが弱まっている (an句がより背景化している) と言えただろう。

次に、過程の強調説に移る。過程の強調機能も、結論を言えば、bemerkenのbe-には認めにくいと思われる。今回の分析では、同時知覚のwie文との共起頻度 (③) が「過程の強調」の指標たりえる可能性があった。同時知覚のwie文は、「知覚の過程を明確にする」(Duden 4 2009: 1046; Zifonun et al. 1997: 2269f.) のであるから、それと共起する頻度が高い語、つまりそれとの親和性が高い語には、「過程の強調」が認められる可能性がある。bemerkenとmerkenを比べた場合、bemerkenの方が同時知覚のwie文と共起する頻度は確かに高いのだが、その差は4件と小さい。bemerkenのbe-に「過程の強調」機能がないとは断言できないが、それが認められるとしても、弱くしか認められないように思われる。

以上のように、bemerkenのbe-には、「関連付けの強調」も「過程の強調」も認めにくい。また、仮に認められるとしても、両者は弱い働きということになる。それに加えて、両機能によっては、bemerkenの諸特徴のうちとりわけ顕著な、対格補語・補文クラスの拡張②、および「意図的な注意」という前提⑤が説明できないという問題がある。

3.2 新たな仮説に向けて

bemerkenの特徴②および⑤は、従来接頭辞に想定されてきたような何らかの一般的・抽象的な機能によっては説明されえないと言える。前者に関して言えば、同種のbe-派生であっても、例えばschützen - beschützenのように、対格補語・補文クラスがむしろ制限を受けるケースもあることに鑑みると、¹⁷ be-に対格補語・補文クラスを拡張する機能があるとは見なしにくい (Kim 1983: 76では、この種の拡張・制限が「語に特有なもの (wortspezifisch)」と言われている)。後者に関して同様で、Dewell (2015) が独自の理論も交え説明を試みているとはいえ、少なくとも筆者の理解の範囲内では、be-の機能という形では説明されにくい。確かに、何らかの前提が加わること、つまり意味的に

¹⁷ beschützenの対格目的語は、人や組織といった有性名詞に制限される。

複雑になることは、接頭辞が付与されること、つまり形態的に複雑になることによつて動機づけられていると考えられるが、be- に「意図的な注意」という前提を加える機能がある、とまでは見なしにくい。

ではどのように考えればよいか。本稿では以下、②や⑤のようなbemerkenの意味的・統語的特徴が、be- の何らかの一般的・抽象的な機能によつてではなく、他の特定のbe-動詞 (be-x) からの類推によつて導き出されている可能性を検討してみたい。ここで言う類推 (Analogie) とは、例えばAがa, b, c, dという特徴を有し、Bが見たところa, b, cという特徴を有する場合に、Bもdの特徴を有すると推測することである (Lewandowski 1984: 56)。つまり、bemerkenと形態的特徴 (be-) ならびに、いくつか (n個) の意味的・統語的特徴を共有するbe-xからの類推によつて、bemerkenに②や⑤のような特徴が加わっている可能性を検討したい。

仮に、bemerkenの意味的・統語的特徴がbe-xからの類推によつて導かれると言えるならば、bemerkenのbe- には、「be-x とのさらなる意味的・統語的共通性を類推することへの形態的な貢献」という、個別的・具体的な機能が認められることになる。というのも、be- の付与によつてbe-xとの共通点はn個からn+1個に増えるが、このように共通性が増せば、その分類推が容易になるからである。よつて、まずはbe-x の候補を検討したい。¹⁸

3.3 類推元の検討

be-xの候補を探る手掛かりは、be-動詞の体系におけるbemerkenの位置づけにあると考えられる。be-動詞の体系はGünther (1974) によつて記述されているが、bemerkenの位置づけに関しては、再考の余地がある。

Günther (1974: 215ff.) は、bemerkenを「語彙化したbe-動詞 (Lexikalisierte be-Verben)」(タイプ8) の下位分類である、「慣用化しているが、脱動機化していない動詞 (idiomatisiert[e], aber nicht demotiviert[e] Verben)」(タイプ8.1) に数え入れている。ここでいう「慣用化」とは、意味用法の上で類似の集合を形成しないことであり、「脱動機化」とは、派生語と基盤語の意味的な乖離が、相互の関係が見通せないほど大きくなることである (例えばfehlen - befehlen)。¹⁹

「気づく」という語義が念頭にある前提で以下述べるが、bemerkenは確かに

¹⁸ 通時的にはむしろ、be-xとの意味的・統語的共通性に基づく類推によつて、特定の語義のmerkenにbe- が付与されたと見るべきだろう。

動機があると考えられる。しかし、bemerkenが慣用化しているとは見なしにくい。bemerkenは、例えば「気づく」という語義のbeobachtenと意味用法の上で類似の集合を形成するのではないだろうか。当該語義の辞書記述を引用する。

(22) <etw. [an jmdm, etw.] b.) *feststellen, bemerken*: nichts Besonderes an jmdm., etw. b.; man konnte dabei b., dass.../wie...; das ist gut beobachtet. (Duden 2 2012: 176)

(22)において、語釈に「気づく」という語義と考えられるbemerkenが用いられていることも大きいですが、それ以外にもbemerkenと同様に認識の手がかりを表すan前置詞句を任意に伴える点、dass文やwie文を伴える点など、beobachtenの当該語義は、「気づく」という語義のbemerkenと多くの共通点を有していることが分かる。²⁰

このことから、第1に「気づく」という語義のbemerkenは、類似の集合を全く形成しないというわけではなく、少なくとも「(観察して) 気づく」という語義のbeobachtenとペアをなすと言える。さらに、この小さな集合は、Günther (1974) の分類では、beschauenを筆頭とするタイプ4に含まれることになる。Günther (1974: 148ff.) によれば、タイプ4は「感覚器官の活動 (Betätigung eines Sinnesorgans)」を表すという意味特徴を有するbe-動詞の分類先であり、どの感覚器官の活動かに応じてさらに下位分類される。bemerkenは、先行研究でも指摘されていた通り (6b)、目の活動を、つまり見ることを含意することが多いので、基本的にはbesehenを筆頭とする4.4に分類するのが適切と言える。

すると、bemerkenの特徴②および⑤は、形態的共通性 (be-) およびn個の意味的・統語的特徴の共通性に基づく、beobachtenや他の4.4タイプのbe-動詞からの類推として説明できる。bemerkenの対格補語・補文クラスの拡張という特徴②は、beobachten等の対格補語・補文が [+抽象物] であるのみならず、[+具体物] という特徴を有すること (Günther 1974: 148ff.) の反映と見なせる。また、bemerkenの前提が「意図的な注意」という内容であること (⑤) は、

¹⁹ タイプ8は、be-動詞の体系の間縁部に位置づけられる動詞の分類先であり、このタイプの成員は体系性が弱い、すなわち特異性が強いとされる。ただ「語彙化」という用語をGünther (1974) は、befehlenのような例、つまり慣用化と脱動機化の双方が認められる例に用いているわけであるから、タイプ8全体を「語彙化したbe-動詞」と呼ぶのは適切ではないだろう。

²⁰ 通時的に見ればbemerkenとbeobachtenの類似性はより明らかである。Duden 7 (2014: 557) によれば、bemerkenは中高ドイツ語では、まさしくbeobachten、それからprüfenを意味していたという。

beobachten等の「観察」という意味合いの反映と見なせる。なぜならば、「観察」は「意図的な注意」を含意すると考えられるからである。なお、「観察」は多かれ少なかれ「継続的」であるから、仮に「過程の強調」がbemerkenに実際に認められるとしても、beobachten等のbe-動詞からの類推と説明することも可能になる。

bemerkenの特徴②および⑤を説明するには、以上のようにbeobachten等からの類推を仮定するのが最良に思われる。

3.4 まとめ

まとめると、bemerkenの特徴②および⑤は、形態的共通性 (be-) およびn個の意味的・統語的共通性に基づいて、beobachtenや他の4.4タイプのbe-動詞からの類推によって生じている、と考えられるし、そう考える必要があるということになる。したがって「bemerkenのbe- には、beobachten等とのさらなる意味的・統語的共通性を類推することへの形態的な貢献」という、個別的・具体的な機能がある、との仮説を提示したい。

4. おわりに

まずこれまでの論述を振り返る。論述は3点に要約できる。第1に、merkenとbemerkenには、現時点では断言できない点（「？」を付した箇所）も含めて、意味用法の差異が5点挙げられる。(21)を(23)として再掲する。

- (23) ①受動文との相性：merken<bemerken
 ②〈対象〉の種類：両語とも [+抽象物] であるが、merkenでは [-具体物]、bemerkenでは [+具体物] である
 ③? 同時知覚のwie文の共起頻度：merken<bemerken
 ④? an前置詞句の共起頻度：merken>bemerken
 ⑤「意図的な注意」という前提: bemerkensのみ有する

第2に、上記の差異に鑑みると、bemerkenのbe- には、先行研究から予想される「関連付けの強調」も「過程の強調」も認めにくいと言える。また、仮に両者が弱い形で認められるとしても、それだけではbemerkenの諸特徴のうちとりわけ顕著な、対格補語・補文クラスの拡張②、および「意図的な注意」という前提⑤が説明できないまま残る。

第3に、両者は一般的・抽象的機能によって説明できるものではなく、特定のbe-動詞からの類推によってしか説明しえないと言える。意味的・統語的共通性に鑑みると、類推の候補はbeobachten等と考えられる。つまりbemerkenの特徴②および⑤は、bemerkenとn+1個の特徴（n個の意味的・統語的特徴+be-という形態的特徴）を共有するbeobachten等からの類推によって説明し得ることになる。そうするとbemerkenのbe-には、beobachten等との共通性をn個からn+1個に増やし、それによってさらなる意味的・統語的共通性を類推することを容易にする働きがあることになる。したがって本稿は、bemerkenのbe-に関して、次の仮説を提示する。

- (24) bemerkenのbe-には、beobachten等とのさらなる意味的・統語的共通性を類推することへ形態的に貢献する機能がある。

最後に、今後の展望について述べる。(24)からは、簡潔に言えば「特定の語からの類推を促進する機能」を接頭辞に認めることで、よりよい説明が可能になる接頭辞動詞の存在が予測される。そういった例を示すことで(24)をより説得力のある仮説にすることが、今後の課題として挙げられる。

文献表

- 中條宗助 (1982) : 『ドイツ語類語辞典』, 三修社.
- 成田節 (2005) : 「ドイツ語のbe- 動詞表現 一対格化をめぐる一」, 『言語情報学研究報告』, No.7, p. 361-381.
- Brinkmann, Hennig (1971) : *Die Deutsche Sprache: Gestalt und Leistung*, 2. Auf., Düsseldorf.
- Beaton, K.B. (2001) : *A Practical Dictionary of German Usage*, Oxford.
- Dewell, Robert B. (2015) : *The Semantics of German Verb Prefixes*, Amsterdam.
- Donaldson, Bruce (2004) : *Mastering German Vocabulary: A Practical Guide to Troublesome Words*, London.
- Duden 2 (2012) : *Das Stilwörterbuch*, 9. Aufl., Mannheim.
- Duden 4 (2009) : *Die Grammatik: Unentbehrlich für richtiges Deutsch*, 8., überarbeitete Aufl., Mannheim.
- Duden 7 (2014) : *Das Herkunftswörterbuch: Etymologie der deutschen*

- Sprache*, 5., neu bearbeitete Aufl., Berlin.
- Duden 8 (2010) : *Das Synonymwörterbuch: Ein Wörterbuch sinnverwandter Wörter*, 5., vollständig überarbeitete Aufl., Mannheim.
- Eroms, Hans-Werner (1980) : *Be-Verb und Präpositionalphrase: Ein Beitrag zur Grammatik der deutschen Verbalpräfixe*, Heidelberg.
- Eroms, Hans-Werner (1987) : „Was man nicht bespricht, bedenkt man nicht recht.“ Bemerkungen zu den verbalen Präfixen in der Wortbildung, in *Neuere Forschung zur Wortbildung und Historiographie der Linguistik*, hgg. v. Asbach-Schnitker, Brigitte / Roggenhofer, Johannes, Tübingen, 109-122.
- Farrell, R.B. (1978) : *Dictionary of German Synonyms*, 3. ed., Cambridge.
- Fleischer, Wolfgang / Barz Irmhild (2012) : *Wortbildung der deutschen Gegenwartssprache*, 4. Aufl., Berlin.
- Günther, Hartmut (1974) : *Das System der Verben mit BE- in der deutschen Sprache der Gegenwart: Ein Beitrag zur Struktur des Lexikons der deutschen Grammatik*, Tübingen.
- Kim, Gyung-Uk (1983) : *Valenz und Wortbildung: Dargestellt am Beispiel der verbalen Präfixbildung mit be-, ent-, er-, miß-, ver-, zer-*, Würzburg.
- Kühnhold, Ingeburg / Wellmann, Hans (1973) : *Deutsche Wortbildung, Typen und Tendenzen in der Gegenwartssprache, Erster Hauptteil: Das Verb*, Düsseldorf.
- Lewandowski, Theodor (1984) : *Linguistisches Wörterbuch 1*, 4., neu bearbeitete Aufl., Heidelberg.
- Motsch, Wolfgang (2004) : *Deutsche Wortbildung in Grundzügen*, 2., überarbeitete Aufl., Berlin.
- Vater, Heinz (1976) : Wie-Sätze, in *Grammatik: Akten des 10. Linguistischen Kolloquiums Tübingen 1975*, Bd. 2, hgg. v. Braunmüller, Kurt / Kürschner, Wilfried, Tübingen, 209-222.
- Zifonun, Gisela et al. (1997) : *Grammatik der deutschen Sprache*, Berlin.